ISSN 2434-0138
2020 年 7 月 7 日 発行

GENSEI-SEIBUTSU

原生生物

第 3 巻 第 1 号（2020）

日本原生生物学会
Japan Society of Protistology
http://protistology.jp

原生生物　第 3 巻　第 1 号

目次

特別寄稿
追悼　内藤 豊 先生の思い出
高橋 三保子 （筑波大学 名誉教授） …… 1

第 53 回 日本原生生物学会大会（JSP/KSOP Joint Meeting 2020 神戸）のご案内
洲崎 敏伸（神戸大学） …… 2

第 52 回 日本原生生物学会大会（水戸大会）のご報告
北出 理（茨城大学） …… 3

学会賞 受賞者コメント
永宗 喜三郎（国立感染症研究所） …… 5

奨励賞 受賞者コメント
ソン チホン（生理学研究所） …… 6

BPA 受賞者コメント …… 7
小森 美沙希（奈良女子大学大学院）
原田 亮（筑波大学）
梁瀬 隆二（筑波大学，現オックスフォードブルックス大学）

会員による近刊出版物紹介 …… 8

書　評
『おもしろ ミクロ生物の世界　ミジンコ・アメーバ・ゾウリムシ なかまたちが大集合！』
洲崎 敏伸（神戸大学） …… 9

学会活性化委員会からのお知らせ
末友 靖隆（岩国市ミクロ生物館） …… 10

若手の会 通信
矢﨑 裕規（理化学研究所） …… 11
「原生生物学会若手の会キャリアセミナー」開催報告
内之宮光紀（電力中央研究所） …… 11
「原生生物・寄生虫・進化セミナー Online」
矢﨑 裕規（理化学研究所） …… 12

本会記事・その他 …… 13

事務局からのお知らせ
庶務 洲崎 敏伸（神戸大学）・庶務補佐 杉浦 真由美（奈良女子大学） …… 19

編集委員会からのお知らせ
「原生生物」担当 道羅 英夫（静岡大学）・矢吹 彬憲（海洋研究開発機構） …… 20

追悼　内藤 豊 先生の思い出

高橋 三保子 （筑波大学 名誉教授）

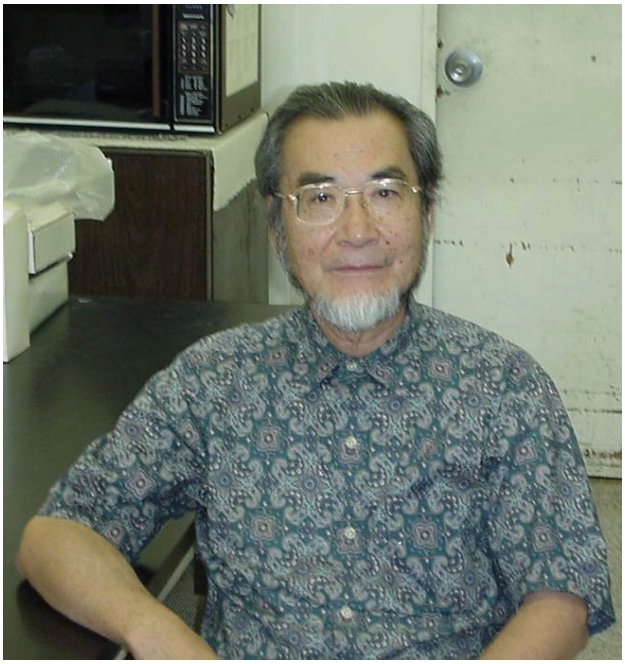
COVID-19 の話題が日本中を席巻しているゴールデンウイークのさなか，ゾウリムシを「泳ぐ神経細胞」と称した内藤 豊 筑波大学名誉教授が 1 月 17 日に他界されていたという情報が飛び込んできた．その知らせは驚きとともに，誰の脳裏にも懐かしい思い出も呼び起こしたことだろう．

内藤さんの出身研究室の東京大学の動物生理学教室は，鎌田 武雄 教授以来，特に原生動物を使った膜の電気現象の研究の中心だった．今では，常識中の常識になっているけれど，ゾウリムシが機械的な刺激に対し逃避反応をする時に，電位依存的にカルシウムチャネルを活性化し，カルシウムイオンが直接繊毛打方向の逆転を引き起こすことを，内藤さんは見事な実験で証明してみせた．この研究は，1973 年日本動物学会賞の受賞に繋がっている．

内藤さんは知的好奇心が旺盛で，科学の分野を問わず，筑波大学の教員用ラウンジで，議論好きの人を捕まえては科学談議をしている姿が目に浮かぶ．UCLA での Roger Eckert 教授との共同研究，定年退職後は自ら研究費も得てハワイ大学で研究を続けるなど，晩年になっても科学への情熱は衰えることは無かった．

群れるを好まず，来るものを拒まず去る者は追わず，卒研生も自分で発掘したテーマに取り組み，それを全面的にサポートする形で研究指導をしていた．

私事を言えば，「日本で伝統的に使ってきたゾウリムシ（*Paramecium caudatum*）で，突然変異体を取って欲しい」と当時 UCLA におられた内藤さんからの要請で 2 年の留学の機会を与えていただいたし，筑波大学に助教授として呼んでくださったのも内藤さんだった．もう 40 年以上前のことである．浮かぶのは，「ありがとうございました」という言葉しか無い．



ハワイ大学 Richard Allen 教授の実験室にて，2000 年頃

内藤 豊 先生 追悼集投稿サイトより，管理者の許可を得て掲載
https://sites.google.com/optphys.com/dr-yutaka-naitoh/

第 53 回 日本原生生物学会大会（JSP/KSOP Joint Meeting 2020 神戸）のご案内

大会長 洲崎 敏伸（神戸大学）

会議名　：JSP/KSOP Joint Meeting 2020（日韓原生生物学会合同大会）
会　期　：2020 年 11 月 21 日（土）～ 11 月 23 日（月）
会　場　：神戸大学先端融合研究環統合研究拠点コンベンションホール
（https://www.kobe-u.ac.jp/info/outline/facilities/kuirc/index.html）

第 53 回大会は，韓国原生生物学会との合同大会として，2020 年 8 月 30 日 ～ 9 月 1 日に神戸市で開催する予定でした．しかし，新型コロナウイルス感染症の対応として，会期を 11 月 21 日 ～ 23 日に延期しました．今後の状況によっては会期の再変更や中止，あるいはオンライン開催への変更も検討することとなりますので，詳細は以下のホームページにて随時お知らせします．

JSP/KSOP Joint Meeting 2020 ウェブサイト
https://sites.google.com/view/kobe2020

第 52 回 日本原生生物学会大会（水戸大会）のご報告

大会長　北出　理（茨城大学）

日本原生生物学会第 52 回大会は，2019 年 10 月 25 日（金）から 10 月 27 日（日）までの 3 日間，茨城大学（水戸キャンパス）において，図書館ライブラリーホールを主会場に開催されました．茨城県水戸市での大会は，1997 年の第 30 回大会，2010 年の第 43 回大会につづいて，3 度目の開催となりましたが，今回は茨城大学理学部との共催で大会を開催させていただきました．

本大会には，名誉会員の 浅井 博 先生と 高橋 三保子 先生のお二人をはじめ，一般会員 44 名，学生会員 25 名，非会員の参加学生 4 名，さらに若手の会主催イベントと大会シンポジウムの招待者 7 名，非会員運営スタッフ 11 名の計 91 名の皆様にご参加をいただくことができました．

大会 1 日目は，午後から風雨の強い悪天候の中での開催となりました．まず若手の会企画からのスタートでした．この企画では，はじめに「原生生物学会若手の会キャリアセミナー」として，4 人のパネリストをお招きして，研究者としてのキャリア形成に関するパネルディスカッションが行われました．続いて，「月井先生のレガシー：原生生物情報サーバ　月井 先生の愛した *Stentor pyriformis*」と題して，2018 年に亡くなられた 月井 雄二 先生のメモリアル講演を保科 亮 会員に行っていただきました．夕方から生協食堂で行われた若手の会懇親会も，大いに盛り上がりました．

翌日からは一転穏やかな天気となりました．2 日目から 3 日目にかけて行われた一般講演では，口頭発表が 19 題，ポスター発表も同じく 19 題と多数のご講演をいただきました．参加者の皆様には講演会場・ポスター会場が熱気に包まれるような，活発な議論を行っていただきました．

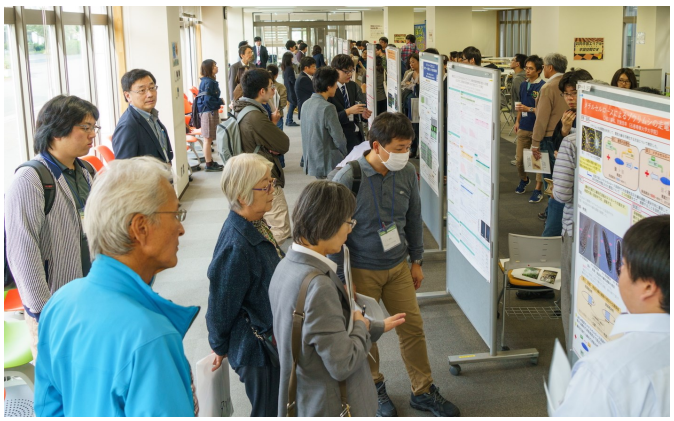
大会長挨拶

2 日目の総会では，2019 年度の日本原生生物学会 学会賞が永宗 喜三郎 会員（国立感染症研究所）へ，奨励賞がソン チホン 会員（生理学研究所）へ授与されることが報告されました．総会の後には，永宗 会員に「トキソプラズマの寄生戦略に関する分子細胞生物学的研究」と題して学会賞受賞記念講演を行っていただきました．また，ポスター発表会場では，ソン 会員に「渦鞭毛藻 *Oxyrrhis marina* の核に関する構造的研究」と題し，受賞記念ポスター講演を行っていただきました．

夕方から大学茨苑会館食堂で行われた懇親会は，春本 晃江 会長のご挨拶と，三輪 五十二 前水戸大会長による乾杯のご発声とともにスタートし，参加者の皆様思い思いにご歓談をいただきました．また，懇親会の中で，若手会員の発表を対象として選考されたベストプレゼンテーション賞 (BPA) の授賞式も行われました．2019 年度は，小森 美沙希 会員（奈良女子大学大学

月井 先生メモリアル講演

永宗 会員による学会賞受賞記念講演



ポスター会場

大会懇親会

院）の「*Blepharisma hyalinum* のガモン 1 相同遺伝子の全長配列とその特徴」，原田 亮 会員（筑波大学）の「ユーグレノゾアにおけるミトコンドリア局在 DNA ポリメラーゼの進化」，梁瀬 隆二 会員（筑波大学）の「除膜モデルによるハプト藻ハプトネマの運動制御解析」が BPA に選ばれました．

さらに大会 3 日目の最後のプログラムでは，「新たな手法で拓く原生生物学研究」と題して 4 人のシンポジストによる大会シンポジウムが開催されました．

水戸での大会をお引き受けするにあたっては，ベテラン会員の皆様に参加して良かったと思っていただけることは勿論ですが，若い世代の会員のみなさんにも，なるべく研究を進める上で役立つような大会にできれば，と考えました．そこで大会シンポジウムでは，若い世代の研究者の方に，研究手法や解析技法にも焦点を当てつつ，分かりやすさにも配慮いただいたご講演をお願いしました．当日は，茨城大学の石神 広太 会員に，R を用いた統計解析と一般化線形モデルによるデータの解析について，東京大学の矢﨑 裕規 会員に，多数の塩基配列データセットを用いた大規模分子系統解析について，理化学研究所の雪 真弘 氏に，培養できない微生物の 1 細胞からのゲノム解析について，東京大学の吉田 大和 氏に，分子イメージングとオミクス解析によるオルガネラ分裂機構の解析について，お話しいただきました．シンポジストの皆様には，魅力的かつ勉強になる講演を大変ありがとうございました．

ここで，お詫びを申し上げねばなりません．今回の大会では，日程が土浦市花火大会や水戸黄門漫遊マラソン大会と重なってしまったため，宿泊の予約が大変取りづらくなってしまい，またバスのダイヤ変更等も生じました．さらに，大会第 1 日目の悪天候のため，若手の会懇親会の途中から常磐線がしばらく不通となり，翌朝もダイヤが大きく乱れるアクシデントがありました．大会にご参加いただいた皆様に大変なご迷惑とご苦労をおかけしてしまい，まことにもうしわけありませんでした．大会長として事前にもっと十分な情報収集と，的確な対応が必要であったと反省しております．この場をお借りしてお詫び申し上げます．このような厳しい条件の中にもかかわらず，ご参加いただいた皆様には，すばらしい発表と熱のこもった議論をいただき，本大会を盛り上げていただきました．まことにありがとうございました．

大会の開催準備にあたりましては，春本 晃江 会長，洲崎 敏伸 副会長をはじめ大会事務局の皆様，矢﨑 裕規 若手の会会長，水戸市コンベンション協会の皆様に，様々な面で多くのご支援とご協力をいただきました．また，大会長の同僚の諸岡 歩希 氏には急遽学会に入会

第 53 回大会（茨城） 参加者一同

いただき，実行委員として一緒に準備をいただきました．北出・諸岡研の学生の皆さんには準備と運営に奔走いただきました．三輪 先生には，多くのアドバイスをいただき，沼田 治 前会長はじめとする会員の皆様には講演会や講演セッションの座長をお引き受けいただきました．山梨大学の野田 悟子 会員と相原 千洋 会員，北出研卒業生の皆さんには，当日の運営をお手伝いいただきました．また本稿の写真は 福田 康弘 会員に撮影いただいたものです．皆様本当にありがとうございました．さらに，ご参加いただいた全ての皆様のお力で，なんとか大会を進めていくことができたと思っております．心よりお礼申し上げます．

最後になりましたが，次回第 53 回大会は，今年 11 月に神戸市ポートアイランドで，韓国原生生物学会との合同大会という記念すべき大会として開催される予定です．昨年度末からの感染症への対応で，大会実行委員会の皆様には大変なご苦労があることと思います．この困難を乗り超えて，また会員の皆様と神戸でお会いし，原生生物の研究について議論できますことを，とても楽しみにしております．

2019 年度 学会賞 受賞者コメント　　永宗 喜三郎（国立感染症研究所）

「トキソプラズマの寄生戦略に関する分子細胞生物学的研究」という題目で名誉ある日本原生生物学会賞をいただくことができ，大変光栄に思います．ご推薦いただきました沼田　治先生，選考委員の先生方，そして新参者の私を暖かく迎え入れていただき，多くのことを教えていただきました学会員の皆さまに心より感謝申し上げます．私は，学部は獣医，大学院は医学研究科と，純粋ないわゆる「生物学」とは無縁の研究生活を送ってきました．大学院ではコレラ菌の産生する溶血毒素の研究で学位を取得し，ポスドクとして補体免疫の研究室に採用され，そこで寄生性原生生物であるアフリカ・トリパノソーマを材料とした GPI アンカー生合成機構の研究に携わりました．これが私と原生生物との出合いになったわけですが，周りには免疫研究者や生化学研究者しかおらず，原生生物学との接点はありませんでした．その研究室ではその後助手として採用していただいたのですが，ただ一人で寄生虫研究を続けることの限界を感じ，また，寄生体・宿主相互作用の研究に携わりたいとの思いから，アメリカ・セントルイスのワシントン大学でトキソプラズマ研究をしている Dr. David Sibley の研究室に留学しました．その研究室もメディカルスクールの department of molecular microbiology に属しており，多くの感染症研究者との交流はあったのですが，今から振り返るとやはり純粋生物学とは異なっていたように思います．

転機が訪れたのは，アメリカから帰国後，テニュアトラック・プログラムの一員として採用していただいた筑波大学に異動してからでした．筑波大学では生命環境科学研究科に所属し，そこで初めて私の専門である感染症学や寄生虫学の隣に広大な原生生物学という学問があることを実感することができました．この時の感覚を細胞工学 32(2): 226–231 に記録として残すことができたので興味のある方はぜひご一読ください．その後，縁あって国立感染症研究所に異動となり，私の立ち位置は再び医学系の研究者に戻りましたが，今後も寄生虫学のみならず原生生物学全体の大きなフィールドを俯瞰した研究が続けられるよう頑張りたいと思っています．また，今までお世話になってきた多くの人たちへのご恩返しのひとつとして，今後は若手の育成や業界の将来へ向けた環境の整備といった方面にも力を尽くしていきたいと考えています．今回の受賞を励みに，今後ますます原生生物学の発展に貢献できるよう努めて参りたいと思います．今後ともご支援・ご協力の程，何卒よろしくお願い申し上げます．

受賞者と春本 晃江 会長（右）

2019 年度 奨励賞 受賞者コメント　　ソン チホン（生理学研究所）

この度は「繊毛虫ミドリゾウリムシにおける細胞内共生機構の解析」という題目で日本原生生物学会奨励賞という大変名誉ある賞をいただくことができ，誠にありがとうございました．選考委員の皆様をはじめ，ご推薦いただいた有川 幹彦 先生に厚くお礼申し上げます．また，研究者の道に導き，受賞の研究をご指導いただきました洲崎 敏伸 先生に感謝を申し上げます．私には，あまりにも意味深い賞ですので，この場を借りてこの研究を支えてくださった皆様に感謝の気持ちを伝えたいですが，文字数の制限を考えて，簡単に氏名だけを書かせていただきたいと思います．春本 晃江 先生，杉浦 真由美 先生，福田 康弘 先生，吉村 知里 先生，末友 靖隆 様，大村 現 様，平岡 三和 様，齊藤 育 様，島田 晴美 様，吉見 英明 様，竹内 喬平 様，熊野 吾郎 様，小泉 智史 様，早川 昌志 様，樋口 里樹 様，千原 あかね 様，誠にありがとうございました．

私が初めて日本原生生物学会に参加したのは 2008 年筑波大学で行なった第 41 回大会で，生まれて初めての学会参加でした．南方の神戸から参りましたので，北方の筑波はとても寒かった記憶が残っています．学部 4 年生の時でしたが，このころは「ミドリゾウリムシにおける細胞内共生機構」について研究を始めたばかりでした．原生生物について勉強をしたくて色々論文を探して読んでいたのですが，素晴らしいと思った論文の著者の先生方々に会場で直接会えて，その時はまるで芸能人に出会ったような気持ちでした．その先生達は私がポスター発表をする時には，学部 4 年生の薄っぺらな説明なのに，説明をよく聞いてくださり，研究者という同じ立場で優しくコメントとディスカッションをしていただきました．たくさんの先生や研究者に出会い，とても楽しかった思い出です．原生生物学会での楽しさは今までも続けられています．現在は色々と他の学会にも参加していますが，原生生物学会のように親しみを感じられる学会はありません．

「ミドリゾウリムシにおける細胞内共生機構」に関する私の研究は共生クロレラが宿主ミドリゾウリムシの細胞中でどのように保持され，宿主とはどのように相互連絡をしているかという問いから始まりました．それを知るためには何よりも宿主細胞内で共生クロレラの様子を見るのが重要だと考えました．結果的に，電子顕微鏡による構造解析を行い，共生クロレラが様々な宿主オルガネラと相互連絡を行うことでミドリゾウリムシの表面に定着する形態的基盤を明らかにしました．特に，共生クロレラが多数の宿主ミトコンドリアと直接的な接触により相互連絡し，さらにミトコンドリアを介して小胞体とも相互連絡することを発見しました．この研究をきっかけに，今では原生生物はもちろん，ウイルスから組織細胞まで電子顕微鏡を用いた構造解析を行っています．これからもたくさんの先生や研究者と協力して参りながら，原生生物学に貢献していきたいと思います．今後とも何卒宜しくお願い申し上げます．

受賞者と春本 晃江 会長（右）

2019 年度 BPA 受賞者コメント

「*Blepharisma hyalinum* のガモン 1 相同遺伝子の全長配列とその特徴」

小森 美沙希（奈良女子大学大学院）

この度はこのような素晴らしい賞をいただき大変光栄に存じます．今回評価していただいた研究は，ブレファリズマ属の中でも珍しい特徴を持つ *B. hyalinum* に関する研究です．遺伝子の全長配列を決定し，その特徴や機能を検討するというシンプルな流れですが，ブレファリズマ属において比較的よく保存されているガモン 1 遺伝子が，*B. hyalinum* においては大きく異なる特徴を持つということで興味を持っていただけたのかなと思います．

学会で発表を行うのは今回が初めてでしたが，たくさんの興味深いご意見やご質問をいただき，大変貴重な経験をさせていただきました．皆様との交流を活かし，少しでもブレファリズマ及び原生生物全体の研究の発展に寄与できるよう，精進したいと思います．この度は誠にありがとうございました．

「ユーグレノゾアにおけるミトコンドリア局在 DNA ポリメラーゼの段階的進化」

原田　亮（筑波大学）

この度は素晴らしい賞をいただき大変光栄です．また台風に見舞われた中，大会を運営してくださった皆様に心より感謝申し上げます．私の所属している筑波大学の橋本・稲垣研究室では真核生物の多様性と進化に関する研究に取り組んでいます．その中で私が着目しているのはミトコンドリア DNA を複製する DNA ポリメラーゼです．ミトコンドリア局在 DNA ポリメラーゼは多くの生物で増殖に必須であり，真核生物とミトコンドリアの進化解明の鍵を握ると考えています．

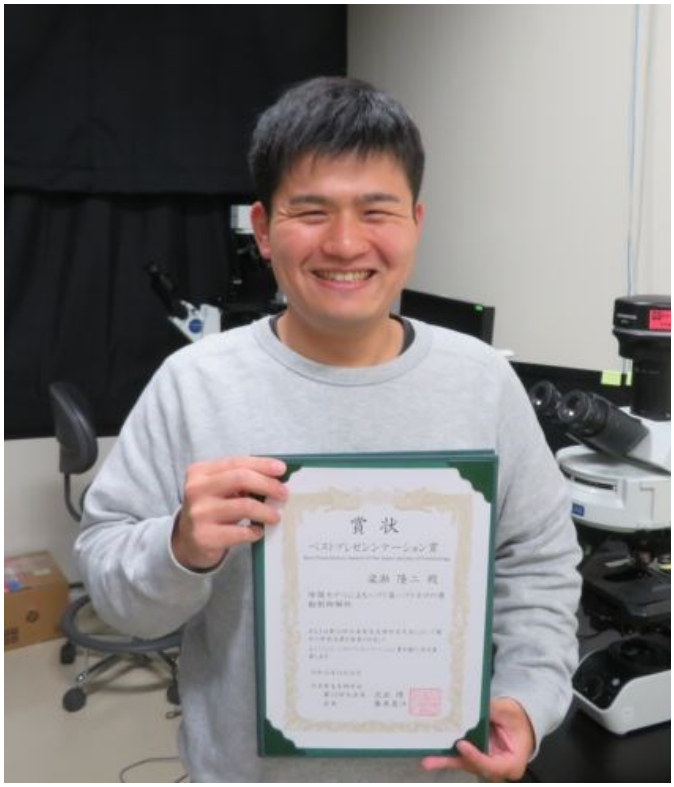
今回我々は，ユーグレノゾアにおいてミトコンドリア局在 DNA ポリメラーゼがどのような進化を遂げたかを研究しました．特にユーグレノゾアにおける 3 つの主要なグループについて DNA ポリメラーゼを探索・系統解析することで，3 グループの多様化とともにミトコンドリア局在 DNA ポリメラーゼのレパートリーが段階的に変化していることを明らかにしました．

学会で皆様からいただいたアドバイスを生かして，この内容を査読付き英文論文にまとめることができました．今回の受賞を励みに，今後もさらに研究を発展させていきたいと思います．

春本 会長，受賞者の原田 会員，梁瀬 会員，小森 会員，北出 大会長（左から）

「除膜モデルによるハプト藻ハプトネマの運動制御解析」

梁瀬 隆二
（筑波大学，現オックスフォードブルックス大学）



筑波大学下田臨海実験センターにて

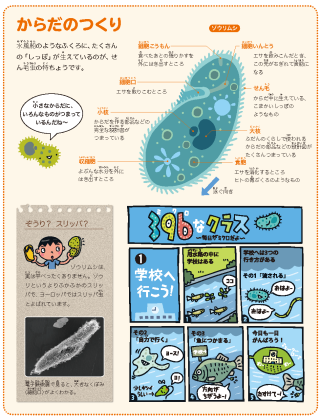
この度は我々の研究を BPA 賞として評価いただき誠にありがとうございます.

今回我々は，ハプト藻類特有の細胞装置ハプトネマの運動が Ca^{2+} によって制御されることを，除膜モデルを用いた実験で確かめました．除膜モデルとは，任意条件の外液が細胞膜を透過できるように界面活性剤で細胞膜を部分的に除去した膜除去細胞のことです．原生生物における除膜モデルを用いた研究は，ゾウリムシやクラミドモナスを用いた繊毛・鞭毛運動制御の研究に始まり，最近では寄生性原虫リーシュマニアや群体性藻類ボルボックスの運動制御の研究に用いられるなど，様々な原生生物の研究に応用されています．今回の研究を通して，原生生物が示す生命現象をダイレクトに見て，調べることができる除膜モデルを用いた研究の面白さと有用性を強く実感しました．新たな分子生物学的手法が次々と多様な原生生物へ応用可能になる一方で，生物そのものに目を向ける研究の大切さをこれからも忘れないようにしたいです.

会員による近刊出版物紹介

「おもしろ ミクロ生物の世界　ミジンコ・アメーバ・ゾウリムシ なかまたちが大集合！」
末友靖隆・著 / 友永たろ・イラスト
偕成社
ISBN 978-4814001811
2019 年 12 月発行，全 80 ページ，価格 2,800 円（税別）

書　評



『おもしろ ミクロ生物の世界
ミジンコ・アメーバ・ゾウリムシ なかまたちが大集合！』

末友靖隆・著 ／ 友永たろ・イラスト

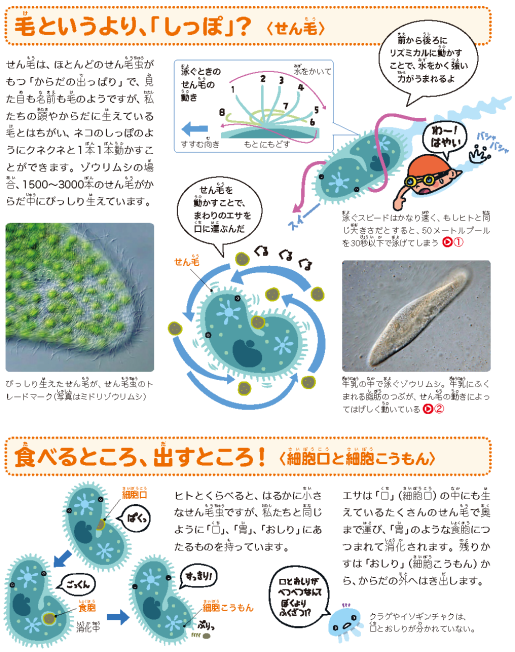
出版社　：偕成社
出版日　：2019 年 12 月
ISBN　：978-4-03-527160-4
価格　：2,800 円（税別）
URL　：https://www.kaiseisha.co.jp/books/9784035271604

洲崎 敏伸
Toshinobu SUZAKI

神戸大学理学研究科
〒657-8501 神戸市灘区六甲台町 1-1

“What is essential is invisible to the eye.”（最も重要なものは目には見えないんだ．サン＝テグジュペリ）

「星の王子さま」の中の言葉です．肉眼では見ることのできないミクロな生き物は，特に子どもたちにとっては手の届きにくい存在です．末友 靖隆さんは，そのような原生生物の魅力をなんとか子どもたちに届けようと，この本を執筆されました．小学生くらいの子どもの好きなことといえば，たとえばポケモンであったり，恐竜や妖怪だったり，最近では「あつまれどうぶつの森」の中で様々な変わった生き物を集めることだったりですが，末友さんの野望は原生生物をこれらに仲間入りさせることのようです．ミクロ生物館の館長としてのこれまでの努力が実を結んだすばらしい一冊で，どのページからも著者の暖かい人間性と科学者としての行き届いた観察眼がにじみ出ています．この本を読んで原生生物の魅力に目覚めた子どもたちが，20 年後に日本原生生物学会の扉をたたいてくれることを楽しみにしたいと思います．ただ一点だけ残念だったのは，ミドリムシのペリクルらせんの方向が多くのイラストで逆になっていたことでした．ミドリムシの研究で博士号を取った末友さんですので，第二版ではここをぜひ修正してもらいたいものです．



Tel: 078-803-5722; Fax: 078-803-5722
E-mail: suzaki@kobe-u.ac.jp
Received: 1 June 2020

学会活性化委員会からのお知らせ　委員長・末友 靖隆（岩国市ミクロ生物館）

学会活性化委員会では，昨年の総会の決議をもとに準会員制度の充実と周知を図るべく，整備を進めさせていただきました．道半ばではございますが，現在の進捗状況について以下の通りご報告申し上げます．

報告 1) 準会員サービス提供窓口「準会員のひろば」の整備

準会員，ならびに準会員への加入を検討している学校教員を対象に，サービス提供窓口を開設しました（学会のトップページからリンクされています）．原生生物の培養や実験，準会員制度に関する質問に正会員が直接お答えする「質問フォーム」を中心に，関連サービスのリンク等から構成されています．なお，窓口の管理は学会庶務が担当いたします．

報告 2) 準会員制度の広報

準会員の対象となる初等・中等教育課程の学校教員に対する広報手段として，本制度や分譲サービスに関する広報を A4 サイズで 3,000 部，全国のスーパーサイエンスハイスクール指定校をはじめとする主要各校に対し，年度内に配布する予定です（新型コロナウイルスによる緊急事態宣言等の発令状況に応じ，適宜調整）．また，関連する学会の年次大会やミクロ生物館ほか，各地の科学館等でも掲示・配布を行う予定です．なお，同様の内容はミクロ生物館のメールマガジン（学校教員・趣味の方を含め数百名が登録中）でも 年度内に配信させていただきます．

報告 3) 令和 2 年 5 月時点の準会員数について

おかげさまで，この半年の期間に新たに 5 名ご入会いただきました．皆様のご支援，ご協力に対し，まずは書中にて心より御礼申し上げます．

また，当委員会では随時「後援希望イベント」を募集しております．今後開催予定の学会やシンポジウム等で当委員会による協力や後援を希望されるものがございましたら，末友まで気軽にご相談ください．

以上，何卒宜しくお願い申し上げます．

学会活性化委員会 委員長　末友 靖隆
E-mail: suetomo@shiokaze-kouen.net

若手の会 通信

矢﨑 裕規（理化学研究所）

2019 年の原生生物学会を終えて迎えました 2020 年で原生生物学会若手の会会長の 2 年目がスタートいたしました．世間では COVID-19 の災禍に悩まされ，大きな社会的な混乱に陥っています．私自身，4 月から理化学研究所数理創成プログラムに籍を移したのも束の間，すぐさま在宅ワークとなり，新しい研究環境に移った実感がわきません．しかし，COVID-19 は災禍だけを運んできただけでなく，より柔軟な働き方の模索やネットワークを介した会議等といった働き方を含め様々な改革の機運も運んできたのも事実です．原生生物学会若手の会もご多分に漏れず，そういった社会の構造変化に対応しようとしています．今回の原生生物学会若手の会通信では，この社会情勢を予見していた（？）ように昨年の第 52 回日本原生生物学会大会で開催しました博士としての働き方を考える“原生生物学会若手の会キャリアセミナー”の活動報告と，原生生物学会若手の会メンバーが運営している原生生物・寄生虫・進化セミナーをオンライン化いたしましたので，そちらの宣伝をさせていただきます．また，オンライン化した原生生物・寄生虫・進化セミナーの様子に関しましては，神戸大学の洲崎先生が「事務局からのお知らせ」の中で参加記を寄稿してくださっていますので，そちらをご覧ください．

「原生生物学会若手の会キャリアセミナー」開催報告

内之宮 光紀（電力中央研究所）

第 52 回日本原生生物学会大会（水戸大会）において，原生生物学会若手の会キャリアセミナーが開催され，植木 紀子さん（法政大学），野牧 秀隆さん（海洋研究開発機構），福田 康弘さん（東北大学），湯山 育子さん（筑波大学）にご登壇いただきました．

まずご自身のキャリアや研究について簡単に説明をいただいた後，パネルディスカッションが行われました．最初に「アカデミックに来て得した？損した？」をテーマに議論が行われ，キャリア切れの不安や競争が激しいというデメリットがあるとする一方で，働き方を自分で決められることや研究自体を楽しめることの利点を皆さん強調されており，トータルとしてはアカデミックに来て得をしたと考えていらっしゃるようでした．次のテーマは「仕事とプライベートのバランスの取り方」でした．研究を楽しんでいることもあってか，仕事とプライベートの線引きは曖昧なところもあるようで，意識して休むことの大切さなどが語られました．また，日本は ON/OFF を切り替えやすい環境かという質問に対しては，早く帰ることの後ろめたさなどを感じるとの意見もあり，社会全体として変わっていく必要性を感じました．3 つ目の議題は「研究テーマの選択について」で，子供の頃から興味があった生物について研究を行っている方や，研究室に配属された後に面白いテーマと出会って研究を続けている方など，研究者への道のりは人の数だけあることを実感しました．次に，研究人生と切り離すことができない「研究費やポストの獲得について」をテーマに議論が行われました．登壇者のみなさんで共通していたのは，申請書の作成には共同研究者からアドバイスをもらうなど，人との繋がりが非常に重要であるということでした．真理を求める研究であったとしても，人間関係は切り離すことができないということが特に印象的でした．そのほかにも教育者としての仕事や英語で論文を書くことの苦労などをお話しいただき，充実し

原生生物学会若手の会キャリアセミナーの様子

原生生物学会若手の会キャリアセミナーの様子

たキャリアセミナーとなりました．

ご登壇いただいた植木 紀子さん，野牧 秀隆さん，福田 康弘さん，湯山 育子さんには深く感謝を申し上げます．また，開催にご協力いただいた大会長の北出 理 先生，実行委員の先生方，スタッフの皆様，そして会場にお越しいただいた皆様に厚く御礼申し上げます．

「原生生物・寄生虫・進化セミナー Online」

矢﨑 裕規（理化学研究所）

原生生物学会若手の会のメンバーが運営に参加している原生生物・寄生虫・進化セミナー（PPE セミナー）は 2018 年 11 月からスタートし，2020 年の 1 月までに 15 回開催してきました．おかげさまで，PPE セミナーは好評を博し，常に 20 人強のセミナー参加者を集められるだけになりました．しかし 2020 年 2 月から COVID-19の影響で物理的に参集するセミナーの開催が難しくなり，一時的休止せざるを得なくなりました．そんな中で今後の PPE セミナー存続を模索してきた結果，オンラインでの再開に踏み切りました．今回のオンライン化は，PPE セミナーが東京で開催しているため，関西や北海道などの他の地域からの参加が難しく，以前よりオンライン化の要望があったことも一因しています．2020 年 4 月 24 日にオンライン化して初めての PPE セミナーで原生生物学会若手の会メンバーでもあります梁瀬 隆二 博士に講演していただきました．このセミナーの様子は洲崎 敏伸 先生に「事務局からのお知らせ」の中でご紹介いただいています．通常開催よりもはるかに多い 60 名を超える参加者があり，非常に盛況でした．今後もこの状況が続く限りは，オンラインでのセミナーを続け，物理的にセミナーが開催可能となってもオンラインでの配信もできるように方法を模索していきます．

オンラインになり，より参加しやすくなったとおもいますので，ご講演を含めて今後も皆様の PPE セミナーへのご参加をお待ちしております．

PPE セミナーホームページ
URL：https://kantoprotist.wixsite.com/tgef-protist

日本原生生物学会 若手の会では，皆様のご意見を募集しています．ご意見，ご要望をお寄せください．
また，若手の会役員も随時募集しています．興味のある方は（young.protistologists.jsp@gmail.com）までご連絡ください．
若手の会ホームページ：https://youngprotistologis.wixsite.com/youngprotistologists

2020 年度 若手の会役員

会長
　矢崎 裕規（理化学研究所）
副会長
　嶺井 隆平（長浜バイオ大学）
庶務
　梁瀬 隆二（オックスフォードブルックス大学）
会計
　内之宮 光紀（電力中央研究所）
ホームページ
　桐間 惇也（あすたむらんど徳島）
　柴田 実咲（奈良女子大学）
　梁瀬 隆二（オックスフォードブルックス大学）兼務
役員
　池田 理佐（岡山大学）
　井坂 友紀（奈良女子大学）
　大北 千紗（奈良女子大学）
　唐澤 宗宏（神戸大学）
　小森 美沙希（奈良女子大学）
　佐々木 愛澄（奈良女子大学）
　柴田 あいか（立命館大学）
　白鳥 峻志（筑波大学）
　末友 靖隆（岩国市ミクロ生物館）
　谷口 篤史（基礎生物学研究所）
　中村 憲章（福井県立大学）
　西上 幸範（北海道大学）
　越後谷 駿（北海道大学）
　矢吹 彬憲（海洋研究開発機構）
　山根 菜摘（奈良女子大学）

本会記事

2019 年度　総会議事録（案）

日　時：2019 年 10 月 26 日（土）16：00 〜 17：00
会　場：〒310-8512　茨城県水戸市文京 2-1-1
　　茨城大学水戸キャンパス
　　図書館 3 階ライブラリーホール

議事

I　報告事項

1　庶務関係
　洲崎 敏伸 庶務担当より，以下の報告があった．

イ．2019 年度日本原生生物学会役員について報告された．

ロ．日本学術会議の協力学術研究団体に採択されたことにより，科研費研究成果公開発表（C）への応募資格が得られたこと，それによって 2020 年開催予定の日韓合同大会の経費を申請することになったことが報告された．沼田 治 特命委員より，協力学術研究団体についての説明があった．

ハ．会員の異動（2019 年 10 月 18 日現在）

		（昨年報告数）
賛助会員	1 団体	（1 団体）
名誉会員	7 名	（7 名）
終身会員	12 名	（11 名）
一般会員	110 名	（108 名）
学生通常会員	34 名	（31 名）
学生 1 年会員	10 名	（8 名）
準会員	0 名	（0 名）
合計	174 名	（166 名）

新入会 26 名，退会 18 名

2　編集関係
　洲崎 敏伸 編集長より，以下の報告があった．

イ．和文誌「原生生物」の pdf での公開方針について，投稿規程に定められている原著論文，総説，コメンタリー，書評，特別寄稿等の記事の単独の pdf ファイルも作成し，ホームページから公開することが報告された．

3　その他

イ．春本 晃江 学会賞等選考委員長より，学会賞に永宗 喜三郎 会員「トキソプラズマの寄生戦略に関する分子細胞生物学的研究」が，奨励賞にソン チホン 会員「繊毛虫ミドリゾウリムシにおける細胞内共生機構の解析」が選ばれた事が報告された．

ロ．島野 智之 生物多様性会議委員より，日本分類学会連合第 18 回総会報告があった．

ハ．末友 靖隆 活性化委員会委員長より，活性化委員会報告があった．内容は，岩国市で開催された「青少年サイエンスセミナー 2019 秋」について，学会活性化に繋がるイベントの支援についてである．

ニ．春本 晃江 会長（国際委員）より，2019 年 7 月 28 日〜 8 月 2 日に開催された第 8 回ヨーロッパ原生生物学会議（ECOP）-国際原生生物学会（ISOP）合同会議の報告があった．本会議に出席した若手会員（5 名）に対して旅費・滞在費の援助として各 15 万円が助成されたこと，その助成金は月井雄二記念国際交流基金より支出されたことが報告された．また，ACOP の実施状況，次回の韓国との合同ミーティングは 2020 年に日本で年次大会と同時期に開催予定であることが報告された．さらに，今後，ワーキンググループを作り，ACOP の開催について，各国際会議への本学会の関わり方について，参加支援の対象とする国際会議について，月井基金の支援対象について話し合うことになったとの報告があった．

ホ．矢﨑 裕規 若手の会会長より，若手の会の 2019 年度活動報告と会計報告があった．

II 審議事項

1　庶務関係

イ．洲崎 敏伸 庶務担当より，会則第 4 条の改訂が提案され，承認された．準会員対象教員の表記変更と，休会制度に関する細則の改訂にともなう，文言の追加である．

ロ．洲崎 敏伸 庶務担当より，会則第 5 条の改訂が提案され，承認された．評議員の業務に関する表記の変更と，準会員および休会中会員の会長・評議員の選挙権・被選挙権に関する文言の追加である．また，春本 晃江 会長より，会長，評議員および監事の任期の変更について，今後，会員の意見を広く収集したいとの説明があった．

2　今後の学会大会関係

イ．洲崎 敏伸 庶務担当より，次々期（2021 年）の年大会は，法政大学（大会長：廣野 雅文 会員）で開催予定であることが説明された．

ロ．次期（第 53 回，2020 年）の年大会について，大会長である洲崎 敏伸 会員より，日韓原生生物学会合同会議として開催されること，大会名称，開催地，日程，内容，暫定予算案が提示された．日韓合同で開催されることになった経緯の確認，および予算案について種々意見交換が行われ，審議の結果，原案のとおり承認された．

3　学会活性化委員会関係

イ．末友 靖隆 活性化委員会委員長より，原生生物分譲サービスの学会としての運用，準会員制度のサービス強化を目的とした準会員に対する分譲サービスの一部無償化，無償化に要する材料費の学会活性化委員会経費からの補填が提案され，承認された．また，準会員制度の広報のため，印刷物の作成・配布が提案され，承認された．

ロ．ミクロ生物館と連携した，学会ホームページも活用した「樋渡文庫」と「柳生繊毛虫図鑑」の整備が提案され，承認された．

4　会計関係

イ．2018 年度会計決算報告および会計監査報告
　有川 幹彦 会計担当より報告がなされた後，細谷 浩史，芳賀 信幸 両監事による監査報告があり，承認された．

ロ．2019 年度中間報告
　有川 幹彦 会計担当より2019 年度の中間報告がなされ，承認された．

ハ．2020 年度予算案について
　有川 幹彦 会計担当より次年度の予算案について報告がなされ，原案通り承認された．

5　その他

イ．次期大会について，洲崎 敏伸 次期大会長より説明があった．

2018 年度 日本原生生物学会 一般会計決算報告

1．収入の部

科　目	予算額	決算額
前年度繰越金	2,240,461	2,867,278
学会費（*1）	894,500	776,500
編集経費繰越分（*2）	500,000	500,000
雑収入	10,000	0
利息	23	26
計	3,644,984	4,143,804

*1：学会費納入率 86.8%
*2：原生動物学雑誌 2010 年以前のアーカイブ PDF の J-STAGE 登載費用

2．支出の部

科　目	予算額	決算額
学会誌印刷代（含郵送費）	250,000	12,772
編集諸経費・謝金	500,000	559,245
NL 印刷代・諸経費	10,000	3,535
庶務諸経費・謝金	50,000	30,650
会計諸経費・謝金	10,000	1,588
大会補助費	200,000	200,000
学会賞等経費	40,000	19,317
若手の会助成金	50,000	50,000
日本分類学会連合分担金	10,000	10,000
日本分類学会連合会議費旅費	10,000	0
通信費	15,000	0
振替手数料	3,000	4,473
支出総計	1,148,000	891,580
次年度繰越金	2,496,984	3,252,224
計	3,644,984	4,143,804

2018 年度 日本原生生物学会 特別会計（国際交流基金）決算報告

1．収入の部

科　目	予算額	決算額
前年度繰越金	952,695	952,695
利息	8	7
計	952,703	952,702

2．支出の部

科　目	予算額	決算額
国際学会参加援助金	500,000	500,000
支出総計	500,000	500,000
次年度繰越金	452,703	452,702
計	952,703	952,702

2018 年度 日本原生生物学会 特別会計（学会基金）決算報告

1．収入の部

科　目	予算額	決算額
前年度繰越金（定期預金）	1,034,133	1,034,133
利息	10	10
計	1,034,143	1,034,143

2．支出の部

科　目	予算額	決算額
支出総計	0	0
次年度繰越金	1,034,143	1,034,143
計	1,034,143	1,034,143

2020 年度 日本原生生物学会 一般会計予算案

1．収入の部

科　目	予算額
前年度繰越金	3,252,224
学会費	800,000
雑収入	10,000
利息	27
計	4,062,251

2．支出の部

科　目	予算額
学会誌印刷代（含郵送費）	50,000
編集諸経費・謝金（含 PC，ソフト）	200,000
学会活性化委員会経費	200,000
庶務諸経費・謝金	50,000
会計諸経費・謝金	10,000
大会補助費	200,000
学会賞等経費	40,000
若手の会助成金	50,000
日本分類学会連合分担金	10,000
日本分類学会連合会議旅費（2 名分）	10,000
通信費（サーバー利用料）	15,000
振替手数料	3,000
支出総計	838,000
次年度繰越金	3,224,251
計	4,062,251

2020 年度 日本原生生物学会 特別会計（国際交流基金）予算案

1．収入の部

科　目	予算額
国際交流基金・前年度繰越金	452,704
利息	2
計	452,706

2．支出の部

科　目	予算額
外国人招待者謝金（日韓合同会議）	100,000
支出総計	100,000
次年度繰越金	352,706
計	452,706

2020 年度 日本原生生物学会 特別会計（基金）予算案

1. 収入の部

科　目	予算額
前年度繰越金	1,034,148
利息	5
計	1,034,153

2. 支出の部

科　目	予算額
日韓合同会議開催補助費（会場費等）	200,000
支出総計	200,000
次年度繰越金	834,153
計	1,034,153

2020 年度 日本原生生物学会 特別会計（月井雄二記念国際交流基金）予算案

1. 収入の部

科　目	予算額
前年度繰越金	9,248,272
利息	92
計	9,248,364

2. 支出の部

科　目	予算額
支出総計	0
次年度繰越金	9,248,364
計	9,248,364

その他

学会賞受賞者名一覧等

日本原生生物学会賞受賞者名

1991 年　沼田 治（筑波大学）
テトラヒメナの多機能タンパク質の研究
1992 年　田邉 和裕（大阪工業大学）
マラリア原虫の寄生に関する分子生物学的研究
1993 年　彼谷 邦光（国立環境研究所）
環境適応における脂質分子の役割
1994 年　今井 壯一（日本獣医畜産大学）
ルーメン内繊毛虫の分類学的研究
1995 年　見上 一幸（宮城教育大学）
ゾウリムシの二核性と核分化の研究
1996 年　藤島 政博（山口大学）
ゾウリムシとホロスポラの共生における宿主－共生生物間相互作用
1997 年　（受賞者なし）
1998 年　芳賀 信幸（石巻専修大学）
イマチュリン：未熟期の分子機構
1999 年　廣野 雅文（東京大学）
クラミドモナスの非保存的アクチン
2000 年　松岡 達臣（高知大学）
繊毛虫ブレファリスマのキノン光センサーと光シグナリング
2001 年　長澤 秀行（帯広畜産大学）
トキソプラズマ感染に対する宿主免疫システム
2002 年　春本 晃江（奈良女子大学）
繊毛虫における細胞間相互作用
2003 年　洲崎 敏伸（神戸大学）
ユーグレナの細胞体変形運動
2004 年　（受賞者なし）
2005 年　（受賞者なし）
2006 年　（受賞者なし）
2007 年　（受賞者なし）
2008 年　（受賞者なし）
2009 年　（受賞者なし）
2010 年　岩本 政明（情報通信研究機構）
テトラヒメナの大核と小核の核膜孔複合体タンパク質の研究
2011 年　（受賞者なし）
2012 年　（受賞者なし）
2013 年　（受賞者なし）
2014 年　月井 雄二（法政大学）
接合型の遺伝解析に基づくゾウリムシの種分化過程に関する研究
2015 年　園部 誠司（兵庫県立大学）
原生生物における運動の分子機構に関する研究

2016 年　小林 富美惠（杏林大学）
マラリア原虫感染に対する宿主免疫機構
2017 年　児玉 有紀（島根大学）
ミドリゾウリムシを用いた二次共生の成立機構の研究
2018 年　島野 智之（法政大学）
土壌環境を中心とした自由生活性の原生生物における種多様性及び生態の解明
2019 年　永宗 喜三郎（国立感染症研究所）
トキソプラズマの寄生戦略に関する分子細胞生物学的研究

日本原生生物学会教育賞受賞者名

2016 年　楠岡 泰（琵琶湖博物館）
微小生物の魅力を伝える琵琶湖博物館
2017 年　（受賞者なし）
2018 年　（受賞者なし）
2019 年　（受賞者なし）

日本原生生物学会奨励賞受賞者名

2004 年　杉浦 真由美（奈良女子大学）
繊毛虫ブレファリズマにおける接合誘導物質の分子生物学的研究
2005 年　有川 幹彦（奈良女子大学）
太陽虫の細胞質および核における Ca^{2+} 依存性収縮系の解析
2006 年　（受賞者なし）
2007 年　西原 絵里（東京医科歯科大学）
Amoeba proteus の収縮胞における水集積機構の研究
2008 年　児玉 有紀（筑波大学）
ミドリゾウリムシと共生クロレラの細胞内共生成立機構の研究
Kim Thi Phuong Oanh (Vietnam Academy of Science and Technology)
Stop codon reassignment in ciliates: evidence for different modes of stop codon recognition by ciliate eRF1s
2009 年　福田 康弘（東北大学）
Nuclear proteins and chromosome structures of the ancestral dinoflagellate *Oxyrrhis marina*
2010 年　保科 亮（立命館大学）
ミドリゾウリムシ共生藻の分類学的研究
2011 年　明松 隆彦（ヨーク大学）
繊毛虫テトラヒメナのプログラム核死
2012 年　（受賞者なし）
2013 年　（受賞者なし）
2014 年　西上 幸範（京都大学）
試験管内再構築系を用いたアメーバ運動における細胞質ゾルーゲル変換機構に関する研究
2015 年　（受賞者なし）
2016 年　末友 靖隆（岩国市ミクロ生物館）
原生生物の認知度向上と教育分野への利活用
2017 年　矢吹 彬憲（海洋開発研究機構）
新規系統の発見と理解から読み解く真核生物の多様性と進化プロセス
2018 年　（受賞者なし）
2019 年　ソン チホン（生理学研究所）
繊毛虫ミドリゾウリムシにおける細胞内共生機構の解析

これまでの大会開催地及び大会長

	開催地	開催年度	大会長
第 1 回	小平市	昭和 42 年	藤田 潯吉
第 2 回	吹田市	昭和 43 年	猪木 正三
第 3 回	広島市	昭和 44 年	尾崎 佳正
第 4 回	東京都	昭和 45 年	松林 久吉
第 5 回	徳島市	昭和 46 年	尾崎 文雄
第 6 回	仙台市	昭和 47 年	樋渡 宏一
第 7 回	奈良市	昭和 48 年	稲葉 文枝
第 8 回	東京都	昭和 49 年	石井 圭一
第 9 回	大阪市	昭和 50 年	高田 季久
第 10 回	東京都	昭和 51 年	盛下 勇
第 11 回	岐阜市	昭和 52 年	野澤 義則
第 12 回	横浜市	昭和 53 年	斎藤 実
第 13 回	吹田市	昭和 54 年	中林 敏夫
第 14 回	つくば市	昭和 55 年	渡辺 良雄
第 15 回	広島市	昭和 56 年	重中 義信
第 16 回	東京都	昭和 57 年	石井 俊雄
第 17 回	津　市	昭和 58 年	安達 六郎
第 18 回	東京都	昭和 59 年	浅見 敬三
第 19 回	大分県	昭和 60 年	山高 里盛
第 20 回	東京都	昭和 61 年	小山 力
第 21 回	山口市	昭和 62 年	星出 一巳
第 22 回	つくば市	昭和 63 年	渡辺 良雄
第 8 回	国際原生動物学会		
	つくば市	平成元年	樋渡 宏一
第 23 回	長崎市	平成 2 年	神原 廣二
第 24 回	伊勢原市	平成 3 年	金田 良雅
第 25 回	奈良市	平成 4 年	菅沼 美子
第 26 回	石巻市	平成 5 年	樋渡 宏一
第 27 回	帯広市	平成 6 年	鈴木 直義
第 28 回	小金井市	平成 7 年	鶴原 喬
第 29 回	東広島市	平成 8 年	細谷 浩史
第 30 回	水戸市	平成 9 年	三輪 五十二
第 31 回	岐阜市	平成 10 年	野澤 義則
第 32 回	仙台市	平成 11 年	渡辺 彊
第 33 回	金沢市	平成 12 年	遠藤 浩
第 34 回	神戸市	平成 13 年	洲崎 敏伸
第 35 回	高知市	平成 14 年	松岡 達臣
第 36 回	東京都	平成 15 年	今井 壯一
第 37 回	山口市	平成 16 年	藤島 政博

第 38 回　帯広市	平成 17 年	長澤 秀行
第 39 回　神埼市	平成 18 年	高橋 忠夫
第 40 回　富山市	平成 19 年	野口 宗憲
第 41 回　つくば市	平成 20 年	沼田 治
第 42 回　石巻市	平成 21 年	芳賀 信幸
第 43 回　水戸市	平成 22 年	三輪 五十二
第 44 回　奈良市	平成 23 年	春本 晃江
第 45 回　姫路市	平成 24 年	園部 誠司
第 46 回　東広島市	平成 25 年	細谷 浩史
第 47 回　仙台市	平成 26 年	見上 一幸
第 48 回　東京都	平成 27 年	八木田 健司
第 49 回　岡山市	平成 28 年	安藤 元紀
第 50 回　つくば市	平成 29 年	沼田 治
第 51 回　松江市	平成 30 年	児玉 有紀
第 52 回　水戸市	令和元年	北出 理

会長・副会長・各種委員・評議員一覧

（2020 年 6 月 17 日 現在）

会　　長：春本 晃江
副 会 長：洲崎 敏伸

庶　　務：洲崎 敏伸
庶務補佐：杉浦 真由美

会　　計：有川 幹彦

編集委員会：
委員長：洲崎 敏伸
英文誌編集長：廣野 雅文
英文誌担当：有川 幹彦，岩本 政明
和文誌編集長：道羅 英夫
和文誌担当：矢吹 彬憲
HP 担当：西上 幸範，梁瀬 隆二
杉浦 真由美，春本 晃江

国際委員：
春本 晃江（会長），洲崎 敏伸，永宗 喜三郎

学会賞等選考委員：
春本 晃江（委員長），園部 誠司，小林 富美惠

学会活性化委員会委員：
末友 靖隆（委員長），有川 幹彦，児玉 有紀，
園部 誠司，堀 学，洲崎 敏伸（庶務）

ネットワーク委員会：
西上 幸範（委員長），白鳥 峻志，杉浦 真由美，
梁瀬 隆二，洲崎 敏伸（庶務）

生物多様性会議委員：
島野 智之

特命委員：
沼田 治，細谷 浩史

事務局：
春本 晃江（会長），洲崎 敏伸（庶務），
杉浦 真由美（庶務補佐），有川 幹彦（会計）

評議員：
有川 幹彦，安藤 元紀，石田 正樹，児玉 有紀，
小林 富美惠，島野 智之，末友 靖隆，
杉浦 真由美，洲崎 敏伸，道羅 英夫，
永宗 喜三郎，西上 幸範，沼田 治，堀 学，
八木田 健司，矢吹 彬憲

監事：
芳賀 信幸，細谷 浩史

事務局からのお知らせ

庶務 洲崎 敏伸（神戸大学）・庶務補佐 杉浦 真由美（奈良女子大学）

評議員会報告

評議員会では，2019 年 10 月～ 2020 年 5 月の間に 9 回のメール評議員会を開催し，以下の事案について協議・決定しました．

1) 会員の休会に関する規定を改訂し，海外留学（ポスドクを含む）やさまざまなライフイベント（出産・育児・介護等）を理由に学会活動を一定のあいだ休止される正会員・学生会員を対象とすることとしました．
2) 本学会に「ネットワーク委員会」を設置しました．
3) 2020 年 5 月に開催が予定されていた ISEP/ISOP 会議に参加する若手会員への参加援助を行うこととし，公募を行いました．その結果，矢﨑 裕規 会員への月井雄二記念国際交流基金を原資とした 15 万円の助成金支給が決定されました．しかし，この学会は新型コロナ感染症対策のために中止となり，助成金の支給は行われませんでした．
4) 学術振興会賞・学術振興会育志賞の被推薦者の募集を行いましたが，いずれも推薦依頼はありませんでした．
5) 会計関係の規約を細則として制定し，ホームページにも掲載しました．
6) 学会の会計年度を総会の日から翌年の総会の前日までとすることとしました．ただし，事務年度は従来通りで暦年とします．
7) 2020 年度の年大会（日韓合同原生生物学会議）に参加する若手会員への参加援助を行うこととしました．
8) 準会員の資格として，「初等・中等教育課程が含まれる学校（小・中・高等学校・高等専門学校等）の教員」を対象とすることとしました．
9) 新型コロナウイルスの感染拡大を受け，2020 年度の学生会費を免除することとしました．

PPE-Online セミナーとESOP (Electronic Symposium on Protistology) に参加してみて

新型コロナウイルス感染症の世界的な大流行により多くの学会が中止あるいは延期となる中で，原生生物関係の学会では 5 月に開催予定だった ISOP/ISEP joint meeting（メキシコ）が中止になった．国内でも，東京で定期的に開催されてきた原生生物・寄生虫・進化（PPE）セミナーが中止になった．さらに，8 月に開催予定であった日韓合同原生生物学会も，11 月に延期の予定となっている．このような状況において，第 16 回の PPE セミナーがオンラインで開催され，次いで，国際原生生物学会（ISOP）の関係者によるオンラインシンポジウムである ESOP も開催された．以下はこれらの会に参加してみた記録である．

PPE セミナーは，2020 年 4 月 24 日の 17 時～18 時に，矢﨑 裕規 氏（現・理化学研究所）が世話人となって Zoom を用いて開催された．演者は梁瀬 隆二 氏（オックスフォードブルックス大学）で，「原生生物のユニークな行動：それを生み出す細胞構造と形態の重要性」というタイトルの講演であった．会の進行は極めてスムーズで，質疑応答も，Zoom の挙手機能とチャットへの書き込みを併用して効果的で活発なものであった．参加者は 60 名を超えており，この会への関心の深さが感じられた．私も自宅からオンラインで参加したが，パワーポイントのスライドが，自分のパソコンのモニターにくっきり表示されるので，リアルな学会に参加するよりも発表内容をより正確に理解することができた気がした．また，ちょうど夕食時だったので，食事をしながら気楽に話を聞かせてもらったが，このようなことができるのもオンライン会議の良い点かも知れない．PPE セミナーには以前から参加したいと考えていたが，それに合わせて上京するわけにもいかず，これまで参加する機会がなかった．どこからでも参加できるというオンライン会議の利点は，遠隔地に暮らす私たちにとってはとてもありがたい．今回の PPE オンラインセミナーで特に印象的だったのは，世話人のスキルの高さである．司会者の矢﨑さんはとても手際よく会を準備・進行させ，参加者からの質問を順序良く仕分けていた．このような知識と技術なくしては，オンラインでの会議は成立しえないであろう．今年のコロナ大流行は不幸な出来事ではあったが，私を含めて特に大学教員の方々はオンライン授業を行うことを余儀なくされている．これによっていやでも培われていくであろうオンライン会議のスキルに

よって，今後の私たちの学会活動の幅も，大きく広がっていくだろう．

ESOP は，2020 年 5 月 6 日と 5 月 7 日に，それぞれ深夜の 0 時～ 2 時（日本時間）の 2 時間で行われ，計 10 名の演者が原生生物の様々なテーマの発表を行った．このシンポジウムは，Patrick Keeling (University of British Columbia)，Javier del Campo (University of Miami)，Fabien Burki (Uppsala University) の 3 氏によって企画・実施され，Zoom と YouTube でリアルタイム配信された．Zoom の参加者は約 250 名，YouTube の視聴者は約 200 名と，世界中の国々から実に多くの参加者があった．今回のシンポジウムはアメリカ太平洋夏時間の朝 8 時～ 9 時に開催されたが，司会者の Patrick Keeling による冒頭のスピーチは，「時差の関係で日本やオーストラリアからの参加者には迷惑をおかけしている」というお詫びの一言から始まった．この時間帯は，日本時間では深夜 0 時～ 2 時，オーストラリア東部時間で深夜 2 時～ 3 時なので，確かに私たちにとっては参加しにくい時間帯である．今回のシンポジウムが 2 日に分けて，それぞれ各 2 時間としたのも，深夜の参加者に考慮した結果なのだろう．ちなみにこの時間帯は，アメリカ東部夏時間では昼の 11 時～12 時，西ヨーロッパ夏時間では午後 4 時～ 5 時である．国際的なオンラインシンポジウムは，世界のどこからでも参加できるし費用もかからないが，開催する際の時間設定の難しさについて，考えさせられた．国際学会ではいつも時差に悩まされるが，ある程度気が張っているせいか，講演会場で爆睡してしまうということはさすがにあまりない．しかし，今回のオンラインシンポジウムは自宅からの参加である．深夜の 2 時ともなるとさすがに眠たい．しかもベッドはすぐ側にある．というわけで，私はシンポジウムの最後までは付き合うことができず，途中で眠ってしまったのはちょっと残念だった．各演者の講演内容はそれぞれに興味深く，質疑応答もスムーズに行われていた．また，今回のシンポジウムで特に斬新だったのは，途中で 10 分間のコーヒーブレイクが設定されていたことである．この間は Zoom の参加者は 25 個の小グループに分かれ，相互に簡単な会話が楽しめるように工夫されていた．

学会に参加する意義は，最新の研究成果を発表し合うことに加えて参加者同士が直接会話することで親交を深めることができるという点にある．オンラインでの学会は，どうしても受け身の参加になってしまいがちである．しかし，最新のオンラインツールを活用することで，従来の学会の形を変えていく新しいサイエンスコミュニケーションの時代が始まっていくのだろう．様々な不安を抱える 2020 年ではあるが，これら 2 つのオンライン会議は，明るい未来の予感を感じさせてくれる意義深いセミナーとシンポジウムだった．

編集委員会からのお知らせ

「原生生物」担当 道羅 英夫（静岡大学）・矢吹 彬憲（海洋研究開発機構）

新型コロナウイルス感染症の影響も少し落ち着いてきたところですが，完全な終息にはまだまだ時間がかかりそうです．外出自粛で持て余した時間にでも，和文誌「原生生物」第 3 巻 第 1 号をご覧いただければ幸いです．

また，引き続き研究活動が制限されてしまっている方もいらっしゃるかもしれませんが，この機会にこれまでの研究成果をまとめて「原生生物」への投稿を検討してみてはいかがでしょうか．前号から，原著論文，総説，コメンタリー，書評などの投稿論文は単独 PDF ファイルでも公開しております．リンクをご活用いただくことにより，閲覧，配布しやすくなりました「原生生物」誌への投稿をぜひご検討ください．

次号，12 月発刊予定の和文誌「原生生物」第 3 巻 第 2 号に掲載する原稿の締め切りは，11 月初旬頃を予定しております．それに向けて，ぜひ原稿をご準備いただければ幸いです．

和文誌「原生生物」投稿規定はこちら

会費等振り込み先

郵便振替口座
郵便振替口座番号：01300-6-103583
加入者名：日本原生生物学会

銀行振り込み口座
ゆうちょ銀行（金融機関コード：9900）
店番：139　　カナ店名：イチサンキュウテン（139 店）
当座貯金　口座番号：0103583
受取人カナ氏名：ニホンｹﾞﾝｾｲｾｲﾌﾞﾂｶﾞﾂｶｲ

原生生物（GENSEI-SEIBUTSU）　第 3 巻 第 1 号

2020 年 7 月 7 日　発行

編集兼発行者　：日本原生生物学会
発　行　所　　：日本原生生物学会
事　務　局　　：庶務担当　洲崎 敏伸，杉浦 真由美
E-mail: gajsp@protistology.jp
編　集　局　　：〒 422-8021 静岡県静岡市駿河区大谷 836
静岡大学 グリーン科学技術研究所 遺伝子実験棟内
「原生生物」編集長：道羅 英夫
Tel/Fax: 054-238-6354
E-mail: dora.hideo@shizuoka.ac.jp